かなめ流通Ｇ　ホットライン

第１３回　夏のゆかた 今と昔

夏の衣「浴衣」の時期となりました、現代では様々な色柄の浴衣がありとても華やかです。一体どのようにして「浴衣文化は今に至るのか」についてご案内してまいります。

① 浴衣の原型は「湯帷子（ゆかたびら）」にあるといわれ、湯帷子を着て川や湖など自然の神聖な水の力で心身を祓い清める水浴に始まるとされています。

湯帷子とは麻製の裏地がない単衣（ひとえ）の衣で、平安時代の頃に高貴な方々や神官が入浴の際に着用したとされています。また当時は、湯帷子を着用し蒸し風呂形式（現在のサウナのようなもの）で入浴し、出た汗を湯帷子に吸わせ、浮いた垢は身拭いで拭きとる形式だったといわれております。

浴衣とは切っても切れないのが『入浴』ですが、その起源は仏教とも密接な関係がありました。「入浴の起源は仏像を湯で洗い浄めたことに始まる」ともいわれ、６～８世紀頃にお寺では布教の目的や衛生状態もあり寺僧の入浴後、近隣の人々に寺の風呂を無料開放する「施浴」があったそうです。

代表的な逸話『光明皇后の施浴』

光明皇后はある悲願のために奈良法華寺の施浴において、千人の俗人の垢を洗い流す事を決めました。ところが最後の千人目にあらわれたのは全身に血膿をもつ悪疾の患者でした。しかし皇后は厭（いと）う事なく背中を流し、さらに膿（うみ）まで吸い出してあげました。

その瞬間、浴室に紫雲がたなびき患者は立ち上がって黄金の光を放ち「我は阿閦（あしゅく）仏なり」と言葉を残し消え去りました。

「千と千尋の神隠し」に出て来る“くされ神”のお話しにも通じる神話ですね。

② 寺院に伝わった「施浴」から江戸時代には二つの様式の公衆風呂へと変化して行きます。

当時は燃料の薪代が高く、また水を確保するのも大変で日常の入浴は「行水」といわれ湯銭を節約する意味でタライに水を溜め陽気で暖まった夕方頃に湯浴みをして、たまに公衆風呂を利用していたようです。

関西地方に多かったのが湯を沸かして蒸気を出す湯釜式の「風呂屋」、関東地方には取り湯式の「湯屋」と呼ばれていたそうです。

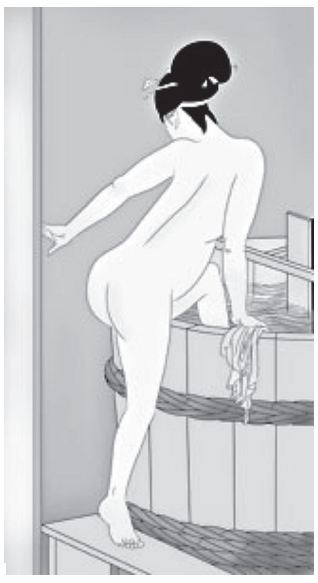
江戸初期は湯量を節約する為にも半身浴蒸し風呂タイプが人気で、膝から下をお湯に浸し上半身はお湯をかけ貴重な湯気を逃さぬよう入り口を引き戸にした「戸棚風呂」

出入り口を低くした「石榴口（ざくろぐち）」石榴口の入り口が寺の屋根の形をしているのは前述の「施浴」のなごりだそうです。

江戸では湯桶に鉄・銅製の火筒を入れて焚く「鉄砲風呂」がありました。

上記の公衆風呂はいずれも町の中心部に置かれる事が多く、町外れの人々に利用されていたのが湯を船に積んだ「湯舟」、水上生活者や郊外の方を対象に河川･水路を巡回営業していたといわれており、現代の「湯舟」の語源となりました。また人目を避けた男女の密会場所としても用いられたそうです。

＜戸棚風呂＞



＜鉄砲風呂＞

＜湯舟＞

＜五右衛門風呂＞

＜石榴口（ざくろぐち）＞

③ お風呂の発展と共に蒸し風呂用に着用していた「湯帷子」から、湯舟に浸かった後に着用する「浴衣」へと変わっていきました。

着衣を持ち運んだり汚さずに脱衣したり、そして入浴後に浴衣を着る際に足元に敷いた布を「風呂敷」といいました。

＜市川団十郎＞

お風呂に入ってさっぱりした後に浴衣を来て町を歩く事が江戸の世には粋だとされ、魅せる浴衣へと発展していきます。花鳥風月や四季折々、様々な想いを込めた紋様や柄が発展し自身の信条まで柄になりました。

有名な模様では歌舞伎役者 市川団十郎がはやらせた柄が「鎌（かま）」「輪（わ）」「ぬ」を組み合わせ「物事にこだわらない」との心意気を表した浴衣です。

④ 着物のように型にはまらず遊べる浴衣が江戸っ子の心を魅了し、幕府が贅沢を禁じ高価な絹や多色染めが使えない中でも木綿素材、藍染一色にしたりと「おしゃれ」を追求していきました。

表は藍染でも裏は色柄を違えたりしてちらりと見える変化が粋とされ、「裏をめくれば江戸の粋」など変化を楽しむ言葉として残っております。

現代では多彩な染色を使い分け多色染めやプリント染め、素材は綿麻生地から化繊生地など多品種となり、形状は丈が短くなったりセパレート型、袖裾にフリルを用いたり、ドレスのようにフレアー型と様々に変化したり、時には浴衣に見えない様式の和服や衣服とも形状を変え多様化し現代の浴衣とされてきています。

元来、型にはまらず遊べるのが浴衣の良さですから、これらの変化も楽しむ事が浴衣文化とも言えるかもしれません。

また今の和服の着方には 1300 年前からの歴史があり「右前を着ること」とあります。自分から見て右手側から先に着て、左の見頃が上に納まる、「右前」という言葉が主につかわれます。

古く平安の頃には高貴な方が左前に着装し、庶民は右前という風習や文化もありましたが諸説あり、現代においては葬儀に関する事は“逆さごと”とされる事から、「生者は右前」・「死者は左前」というのが一般的となりました。

ですので、、、街中で見かける「左前」浴衣をお召しの方は、平安文化を尊ばれる高貴な御身分の方か、もしくはゾンビという事に受け取られかねませんのでご注意くださいませ。

日本の宗教や生活、歴史に育まれて来た「ゆかた」そして現在・未来と発展し続ける「浴衣文化」由縁を知ってお手入れで想いを繋いで行きたいですね。

取材協力：染色補正 彩徳　小林 茂生　先生
文筆：株式会社丸宝　塩野 裕史

「ゆかた」には、こちらの製品はいかがですか？

AMG ゆかた用洗剤

８kg（4kg×2）お買い上げで「ゆかたポスター」をプレゼント！キャンペーンは８月 20 日まで。

松井化学 ゆかたくん

ゆかたくんは、ゆかた･はっぴ･紅白幕等の色が出やすい品物を洗う場合に開発された商品です。

東京紙巧芸 たとう紙

たとう紙で大切なものを湿気から守ってください。既製品から名入れまで、幅広く取り扱いしております。